大妻多摩中学校

二〇二三（令和5）年度

入学試験問題（第一回）

【国　語】

時間　50分

2月1日（水）

【注意事項】

1　問題は17ページまであります。

2　指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。

3　答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。

4　句読点やカギカッコは一字と数えてください。

5　ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

私は、いまの日本の状況においては、「基礎科学は役に立つんですよ」と主張するような立場には身を置かないようにしたいと思っています。というのは、②日本の一つの大きな問題として、「科学（サイエンス）」と「技術（テクノロジー）」が区別されず、「科学技術」という言葉で括られてしまっていることがあるからです。

多くの人は、それが行政の人間であったとしても、「科学」は「技術」の基礎なんだ、という理解をしてしまっています。つまり、基礎科学は技術のためにあるのだという考えを持っている。これは非常に大きな問題だと思います。

(注1)初田さんが言われたように、「科学」というものは、原理や(注2)普遍性や法則性を「発見」する過程です。一方の「技術」とは、「発明」という言葉に代表されるものです。この二つには、じつは大変大きな違いがあるんだということを、もう少しわかっていただく必要がある。そういうことを、私はありとあらゆるところで申し上げてきたつもりです。ただ、もちろん、科学の進歩は技術に支えられていますし、技術の進歩も科学に支えられているということはありますから、二つの関係が密接であるということも、一つの事実ではあります。

こういった背景があるために、日本においては「役に立つ」ということが、そのまま「産業の役に立つこと」や「③　　が便利になること」というように、非常に狭い範囲で理解されてしまっているのです。だからこそ、いまの日本では「役に立つ」という言葉がものすごく(注3)氾濫しているし、私はそのことが、あらゆる意味で社会を窮屈にしてしまっているのだと思っています。具体的な議論はのちほどしたいので、ここではいくつかの例を言わせていただきましょう。

①　　

［　　④　　］

ある学生が、自分の研究を始めるとします。卒業研究でもいいし、（注4）修士の研究でもいいです。すると、親に「あんた、何やってるの？」と言われます。たいていの学生は、必ず言われます。「［　　⑤　　］」って。それで、なかなか答えられないということがあるのです。その一方で、この社会には、就職活動をする学生の多くが「［　　⑥　　］」というようなことを口にする。そんな現状もあります。

だけど、「［　　⑦　　］」というと、ほとんどの人が、じつはよくわかっていません。よく考えないままに、この言葉を使っているのですね。

別の例をあげましょう。いま、研究者が研究費を獲得するために、申請書に「この研究は役に立ちます」ということを⑧安易に書かないといけないという事態が横行しています。たとえば、ある生化学者がある種のタンパク質を研究しているとして、自分が研究しているその素材を使ったらがんを治せるかもしれません、というような作文――ほとんどなんの意味もないような作文――を延々、何年も書きつづけることを強いられているのです。

こうした現状は、研究者にとても悪い影響を与えていますし、若い人たちにも悪い影響を与えています。みんな、それが当たり前なんだというふうに、だんだん思うようになってしまうからです。

私は二〇一七年に財団を設立しました。この財団は、基礎科学の発展、そして基礎研究に打ち込む研究者たちの支援を目的としたものです。助成金を出す際には必ず申請書を出してもらうのですが、「基礎研究」に絞って書いてください、という旨の募集をかけています。

するとみなさん、若者ほどそうなのですが、出口が明確でない研究課題を提案することがとっても苦手なんですね。なので、申請書も貧弱なものが多く、あまりおもしろくありません。そのくらい、なんとなく［　　⑨　　］、という空気が蔓延しているのだと思います。

地方大学を見ても、最近では研究費が本当にないので、⑩地元の産業に結びついた研究をしなさい、という大号令が出ています。地方大学の研究者が基礎研究をしようとすると、非常に肩身が狭い思いをする。そんな状況もあるわけです。

だからこそ私は、科学、つまり人間の［⑪］を拡げる活動というのは、「文化」として捉えたほうがいいんだ、ということをいろいろな場で発言することにしています。

たとえば、［⑫］とかスポーツですばらしいパフォーマンスを目にしたとき、われわれは感動しますよね。その感動というのは、決して「役に立った」という言葉で測られるものではないはずです。科学の達成というのも、そういう意味で測られていく側面が必要なのだと思っています。

（大隅良典「すべては好奇心から始まる――〝ごみ溜め〟から生まれたノーベル賞」『「役に立たない」研究の未来』〔柏書房〕より）

（注1）初田さん――初田哲男。日本の物理学者。
（注2）普遍性――すべての物事に通じる性質。
（注3）氾濫――事物があたりいっぱいに出回ること。あまり好ましくない状況にいう。
（注4）修士――学位の一つ。大学院に二年以上在学して、論文の審査に合格した人が受ける。

問1 ［①］・［④］にはそれぞれの内容の見出しが入ります。その見出しとして適切なものを、次の**ア**～**エ**の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使用しないこと。

ア 日本人は「科学」と「技術」とを区別して理解できている

イ 日本人は「科学技術」という言葉を誤解（ごかい）している

ウ 「役に立つ」が目的の研究は、つまらない

エ 「基礎科学」の研究は「役に立つ」

問2 ――線部②「日本の一つの大きな問題として、『科学（サイエンス）』と『技術（テクノロジー）』が区別されず、『科学技術』という言葉で括られてしまっていることがある」とありますが、どういうことですか。これについて説明した次の文章の［X］・［Y］・［Z］に入る内容を、本文からそれぞれ漢字二字で抜き出して答えなさい。

「科学」というものは、原理や普遍性や法則性を「［X］」する過程であり、一方で「技術」とは、それまでになかった機械や装置などを新たに考え出すことによって「［Y］」するものであり、この二つには大きな違いがある。しかしこの二つの関係が密接であることも事実であるため、「科学は技術のためにある」「科学は技術の［Z］なのである」という理解をし、この異なる二つを「科学技術」という言葉で一括りにしてしまっている。

問3 ［③］・［⑪］・［⑫］に入る言葉として最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使用しないこと。

ア 芸術　　**イ** 科学　　**ウ** 知　　**エ** 生活

問4 ⑤ ・ ⑥ ・ ⑦ ・ ⑨ に入る文章として最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使用しないこと。

ア 役に立ちたいです

イ それって何かの役に立つの？

ウ 「役に立つ」ことをしないといけない

エ そもそも『役に立つ』っていったいなんだろう？

問5 ――線部⑧「安易に」の言い換えとして最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 強制的に　　**イ** 楽観的に　　**ウ** ずうずうしく　　**エ** 軽々しく

問6 ――線部⑩「地元の産業に結びついた研究をしなさい」とありますが、――線部の言い換えとしても最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地元の産業が感動する研究を行いなさい。

イ 地元の産業に基礎研究の価値を広めなさい。

ウ 地元の産業と協力して基礎研究を行いなさい。

エ 地元の産業の役に立つ研究をしなさい。

問7　最近、「実学志向（じつがくしこう）」という言葉をよく耳にするようになりました。実学とは「習得した知識や技術がそのまま社会生活に役立つような学問」のことであり、例えば商学・工学・医学などが挙げられます。その基準で言うと、文学は「実学ではないから役に立たない」と捉えられる場合があり、その考えに押し流されるかのように、大学の純粋な「文学部」は減少傾向にあります。しかし文学を代表する物語作品は、今や小説だけでなく、映画やドラマやマンガやアニメなど様々な形で社会に広がっています。以上を踏まえ、もしあなたの周囲に「小説や物語などの文学は実学ではないから役に立たない」と判断する人がいたとしたら、あなたはどのように反論しますか。**本文の最後の二段落における筆者の考えに沿って**、百字以内で記述しなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文の一部に省略した箇所がある。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

四時間目の社会の時間になった。①みんなはそれぞれ家から昔のものを持ってきていた。

わたしたちは班ごとに机をむかい合わせにしてすわり、合わせた机のまんなかに、それぞれが持ってきた昔のものを置いた。

「きせる」という、昔の人がそれでたばこを吸っていたという長い管のようなものを持ってきた人。昔、どこの家にもあった火鉢という炭を入れる暖房器具の、火のついた炭をつかむのに使っていた「火箸」という長い金属製のはしを持ってきた人。おじいさんが遊んでいたという木製の「独楽」を持ってきた人もいる。大工道具で木をけずるのに使う「かんな」を持ってきたのは玉田くんだった。木の部分はつやつやしていて、歯は光っていた。②そんなに古そうな道具には見えなかった。

「おじいちゃんは病気になる前は大工だったから。うちにはほかにも昔の大工道具がいろいろあるんだ。木の箱に入れてしまってある」

玉田くんはほかにかんなを持ってきている人がいなかったので喜んでいた。

ほかの班の机を見ると、古い雑誌や、古そうなガラスの小瓶や、絵が描かれているお皿や、枯れた木の葉のように見えるうちわなどがあった。

③先生は、ひとりずつ立たせると、持ってきたものをみんなに見えるように上にあげさせ、それが、家族のうちのだれがいつの時代に使っていたものかを話させた。

着物を着るときに使う珊瑚の「帯どめ」や、お茶の道具だという長い柄のスプーンのような「茶杓」や、髪飾りの「かんざし」を持ってきた人もいた。そういうのはぜんぶ女の子が持ってきていた。

「道具は時代によってちがってきているけれど、一つひとつの道具にはその時代の暮らしぶりがあらわれていますね。装飾品や遊び道具にしてもそうですね。木村さんが持ってきた古い香水瓶や、平岡さんのかんざしなんかには思い出もつまっていそうですね」

と先生は話した。

そして、「班ごとにおたがいが持ってきたものを見せあって、それがどんなふうに使われていたか、知っていることを話してください」といった。

「大切なものですからね、傷つけたりしないように注意して見てください」

そういうと、先生は一つひとつの班をめぐりはじめた。

わたしの持ってきた竹のかごを玉田くんは気に入ったみたいだった。「かんなより、ずっと役立ちそうじゃん。ぼく、ほしいなあ。特別な箱って感じだよ」

玉田くんは蓋をあけ、また閉じて、感心したように見ていた。

わたしは坂上さんの持ってきたきせるを手にとって見た。きせるは筒に入れられていた。筒はなにかの植物で細かく固く編まれていて、そこに槍のような柄がはりつけられていた。裏側にはだれかの名前が金色の字ではりつけてある。きせるは吸うところと、たばこを詰めるところが金色だった。かすかにたばこのにおいがした。

「あーっ」

前のほうの席で女の子の声がした。

そっちを見ると、④平岡さんが立ちあがっていた。それからすぐに机の下にしゃがみ込んだ。

先生がすぐにそっちにむかった。

「玉が一個落ちちゃったんです」と大沢さんがいっている。

平岡さんが持ってきていたのは小さい白い玉がいくつもついたかんざしだった。

「真珠が落ちたの？」とだれかがいった。

「先生がさがしますからね、みんなは席についてて。動かないで。きっと近くに落ちているはずだから。みんなは自分の持ってきたものについて知っていることを班の人に話してあげてください」

先生は床(ゆか)によつん這(ば)いになると、あたりをさがしはじめた。

先生は社会の時間が終わるまでに白い玉を見つけることはできなかった。

給食の時間になっても、先生は配膳(はいぜん)をする人たちをよけながら、床を見て歩いていた。

「⑤給食を食べ終えた人はできるだけ校庭にでて、校庭で昼休みをすごしてください。図書室でもいいです。わたしは教室じゅうの床をよく見て歩きたいので、協力してくださいね」と先生はいった。「きっとどこかにあるはずですからね」と、それは平岡さんにいった。

そして給食を食べながら、先生は「もしも昼休みに白い玉を見つけられなかったら、きょうは教室の掃除(そうじ)はなしにしましょう。わたしが放課後掃除をしておきますから」といった。

「真珠だったら、なくしたらお母さんにしかられちゃうだろ」とだれかがいった。

「真珠じゃなくても、かんざしがだめになっちゃうじゃない」とべつのだれかがいった。

「きっとどこかにあるわ」と、先生は平岡さんにいった。

平岡さんは⑥困りはてた顔でうなずいた。きっとお母さんの大切なものだったのだろう。

昼休みになると、わたしは図書室に行った。この前、図工の時間にフェルトペンで写生した植物の絵を持っていった。

わたしが愛読している『植物の図鑑(ずかん)』はわたしがこの前もどした場所にあった。わたしのほかに、この図鑑を見ている人はいないのかもしれなかった。

（中略）

図書室から教室に帰ると、何人かの人はもう教室にもどっていた。前のほうの席に女子が何人か集まっている。平岡さんもいる。

平岡さんが笑っている。

わたしはその子たちのところへ行ってみた。⑦もしかすると、と思ったのだ。白い玉が見つかったんだろうか。

そうだった。平岡さんの手のひらに白い玉が一個のっていた。

「あ、見つかったんだ」と、わたしはのぞき込んでいった。「どこにあったの？」

「先生の机の脚（あし）の陰（かげ）にあったんだって」と大沢さんがいった。

「よかったね。それ、お母さんの宝物？」と、わたしは平岡さんにきいた。

「お母さんはね、くしを持っていきなさいっていったのに、わたしがこっちがいいっていって持ってきたの。だから、失くしたらしかられるところだった」

平岡さんはうれしそうにいった。

「接着剤（せっちゃくざい）かなにかで簡単にくっつけることはできるんじゃないの」と木村さんはいった。

「しっぽが昼休みのあいだじゅう、先生と平岡さんといっしょにさがして、それで、しっぽが見つけたんだって」と大沢さんがいった。

「あのね、どうしてやめないの。モッチのことをしっぽって呼ぶのを」とわたしはいった。

「あれ？　ちょっと待って。曽良（そら）さんも佐伯（さえき）くんと同じことをいうんだ」

大沢さんはわたしをぐっと見た。⑧むらむらと腹がたってきた。

「モッチはあんたたちのしっぽじゃないよ。モッチってニックネームが一つあればじゅうぶんじゃん。モッチがしっぽなら、大沢さんはなに？　ヘッド？　ハット？」

そばでモッチは下をむいていた。

「自分が正しいことをいってるって思いたいんでしょ。だれかの言葉じりをつかまえてはすぐに『いじめだ』っていいだしたりするんだよね、曽良さんも、佐伯くんにしても。そういうのをいい子ぶってるっていうの。いいかっこしないでよ」

大沢さんはぐっと胸をそらした。

⑨ モッチがわたしのシャツのすそを引っぱった。

「よくないよ、モッチ。こんどしっぽって呼ばれたら、ぜったい返事なんかしちゃだめ。それか、しっぽって呼ばれたら、『なあに、帽子』っていい返せばいいよ。そういうのをがまんしてちゃだめ」

「わたしたち、モッチのことをいじめてなんかいないよ」と竹下さんがいった。

「人が嫌がってることもわかんないなんて、鈍感なだけでしょ。モッチのことをしっぽって呼んでるのはあんたたちだけじゃん」

「仲間だからよ」と平岡さんがいった。

「自分たちに都合のいい言い訳をしているだけでしょ。そんなの仲間じゃない」

モッチが手で涙をぬぐった。モッチはしずかに涙を流していた。

「モッチにあやまりなさいよ」と、わたしは大沢さんにいった。

大沢さんは顔をそむけて、「いいよ、もうモッチのことは呼ばないから」というと、自分の席にもどっていった。

ほかの子も平岡さんの机から離れていった。

「平岡さん、モッチにちゃんとお礼をいったの？」とわたしはいった。

「いったよね、ありがとうって」

平岡さんがいうと、モッチはうなずいた。

わたしは自分の席にもどった。昼休みが終わるチャイムが鳴りはじめた。

校庭の掃除当番になっていたわたしは席をたって、教室をでた。

教室をでる前に、ちらっとモッチを見た。

モッチは一列置いて同じ前から二番目の席の平岡さんにほほえみかけていた。モッチは今週、平岡さんといっしょに教室の掃除当番になっていたはずだった。

⑩モッチって、もしかしたらわたしが思っていたような人じゃなかったのかもしれない、と階段をおりながら思った。人のいいなりになっている弱虫のモッチって思っていたけれど、モッチはほんとはそんな人じゃないのかもしれない。わたしが図書室で図鑑を調べているあいだ、モッチはずっと先生と平岡さんといっしょに白い玉をさがしつづけていたのだ。そんなことをする人はほかにだれもいなかったのに。そしてさっき涙を流したあとで、モッチは平岡さんにほほえむことができるのだ。モッチのことなんて、とわたしは思った。ほんとうはなにもわかっていなかったのかもしれない。

わたしはなんだかとてもはずかしい気もちになった。

（岩瀬成子（いわせじょうこ）『わたしのあのこ　あのこのわたし』〔ＰＨＰ研究所〕より）

100

問1 ――線部①「みんなはそれぞれ家から昔のものを持ってきていた」について、以下の問いに答えなさい。

(1) 「わたし」が持ってきたものは具体的には何ですか、本文中から抜き出して答えなさい。

(2) 「わたし」の班のみんなが**持ってきていないもの**を、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 昔の人がたばこを吸っていた長い管

イ 昔はどこの家にもあった火鉢

ウ 昔の暖房器具に火のついた炭を入れる金属製の箸（はし）

エ 昔おじいさんが遊んでいたという木製の遊び道具

問2 ――線部②「そんなに古そうな道具には見えなかった」について、以下の問いに答えなさい。

(1) この「道具」の使い方が説明されている部分を五字で抜き出して答えなさい。

(2) 昔のものなのに、「そんなに古そうな道具には見えなかった」のはどうしてだと考えられますか。その理由として最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手入れをして大切に使ってきたから。

イ 高価な装飾品だから。

ウ 実は新品で買ったばかりだから。

エ もっと便利な道具が登場したため、一度も使われないまま放置されていたから。

問3 ――線部③「先生は、ひとりずつ立たせると、持ってきたものをみんなに見えるように上にあげさせ、それが、家族のうちのだれがいつの時代に使っていたものかを話させた」とありますが、先生がこのような授業を通して気づかせたかったことはどんなことですか。次の**ア**～**エ**の中から**適切でないもの**を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 道具には、その時代の暮らしぶりがよくあらわれているということ。

イ 同じ道具が、時代によってまったく違う使われ方をしているということ。

ウ 道具には、持ち主の思い出もつまっているということ。

エ 道具は、時代によってさまざまに違ってきているということ。

問4 ――線部④「平岡さんが立ちあがっていた。それからすぐに机の下にしゃがみ込んだ」とありますが、平岡さんがこのような行動をとったのはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 真珠が落ちてしまい、すぐに探そうとしてあわててしまったから。

イ お母さんにしかられると思って悲しい気分になり、泣き出してしまったから。

ウ 「あーっ」という女子の声で騒ぎが大きくなったことに、怒りがわいてきたから。

エ 「傷つけたりしないように」という先生の言うことを破ってしまったことに、いたたまれなくなってきたから。

問5 ――線部⑤「給食を食べ終えた人はできるだけ校庭にでて、校庭で昼休みをすごしてください」とありますが、先生がこのように言ったのはどうしてですか。その理由を、「床」「真珠」の二語を必ず用いて四十五字以内で説明しなさい。

問6 ――線部⑥「困りはてた」の意味として最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どうしてよいか分からなくなった

イ あきらめの色を浮かべた

ウ 緊張がほぐれ自然体になった

エ すっかり頼りきった

問7 ――線部⑦「もしかすると」の下には、どのような言葉を補うことができますか。そこに補うのにふさわしい言葉を、本文中から抜き出して答えなさい。

問8 ――線部⑧「むらむらと腹がたってきた」とありますが、「わたし」がそのように感じたのはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大沢さんが、「わたし」の忠告を聞き入れないどころか、挑発するように見てきたから。

イ 「わたし」の忠告が、佐伯くんの言ったこととかぶってしまったから。

ウ みんなにモッチというニックネームを広めたいのに、「わたし」しか使わないから。

エ モッチは「わたし」の仲間なのに、大沢さんにとられてしまったから。

問9 ――線部⑨「モッチがわたしのシャツのすそを引っぱった」とありますが、なぜだと考えられますか。その理由を三十五字以内で答えなさい。

問10 ――線部⑩「モッチって、もしかしたらわたしが思っていたような人じゃなかったのかもしれない」から始まる段落では、「わたし」から見た「モッチ」の人物像の変化が描かれています。その人物像の変化を、変化したきっかけを含め、百字以内で書きなさい。

問11 この小説の特色を述べたものとして、最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 語り手である「わたし」の目を通し、クラスメイトの様子や起こった事件が、生き生きと描かれている。

イ 会話文を多く使い、クラスメイトの人柄やその人の生い立ちが、たくみに描き出されている。

ウ 比喩を多く用い、大人と子どもとの対立や男子と女子との対立が、あざやかに描きわけられている。

エ 回想場面を入れ、昔の道具がどのように使われていたのか、わかりやすく説明されている。

三　次の各問いに答えなさい。

問1　次の各文の――線部①～⑤の**カタカナ**を適切な漢字に改めなさい。

(1)　二〇二二年は、沖縄県が本土に①**フッキ**してから五〇年の②**フシメ**にあたる。

(2)　円が③**キュウラク**し、およそ二〇年ぶりの円安水準を④**コウシン**した。

(3)　第26回参議院議員選挙が⑤**コウジ**された。

問2　次の①～⑤の□にあてはまる擬音語（ぎおんご）や擬態語（ぎたいご）を、あとの**ア**～**オ**の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使用しないこと。

① ひまわりが□大きくなる。

② のらねこが□眠っている。

③ 目的地まで□進んでいく。

④ 大きな猿（さる）が□と木に登る。

⑤ 暑さで喉（のど）が□になりそう。

ア　すいすい　　**イ**　ぐんぐん　　**ウ**　すやすや　　**エ**　するする　　**オ**　からから

以下余白